日本国内におけるブラック部活について
－当事者の語りを通じて－

黒澤 真知

日本国内において部活動は、新たな技能を身につけることや豊かな人間性を育むことのできる機会として、学校教育に組み込まれている。部活動によって進路を選択したり、生涯の趣味として楽しんだりと、部活動が人生において重要な役割を果たす場合もある。その一方で、「ブラック部活」と呼ばれる過酷な状況を有する部活動も存在しており、広く人々の関心を集めている。特に、主要なメディアで取り上げられたことをきっかけに、2016 年頃から注目される機会も増え、2018 年にはスポーツ庁・文化庁それぞれによって「部活動の在り方に関するガイドライン」が策定されているが、それ以前から現在に至るまで部活動における事件や事故は度々明るみに出続けている。

本研究は、「ブラック部活」を経験した当事者らの語りから、運動部・文化部を問わない「ブラック部活」全体を定性的かつ包括的に捉えることを目的として行った。彼らが所属することとなった経緯や「ブラック部活」での体験、その後の人生においてそれらをどのように捉えているのかなど、当事者個人の背景や動機、考え方に着目して聞き取りをすることにより、「ブラック部活」の新たな一面に迫ることを試みた。

本研究では、SNS 上で「ブラック部活」にまつわる発信を行なっている経験者 14 名を対象とし、1 時間半から 2 時間の半構造化インタビューを実施した。期間を 2022 年 4 月から 12 月としたため、新型コロナウイルス感染症の流行状況を鑑み、テレビ会議ツールを利用することによって調査を行なった。

その結果、同様に「ブラック部活」という言葉を用いて発信を行なっている当事者の間でも、それぞれが異なる位置付けを持っているということが明らかになった。「ブラック部活」での経験がその後の人生においてどのように働くかによって、人生の中での非常に大きな出来事として「ブラック部活」を捉える者もいれば、価値のある経験として語る者もいた。また、当事者の多くにとって、部活動所属前後に比較対象となる経験を持つことが「ブラック部活」を認識するきっかけとなっており、そのタイミングや経緯には揺らぎがあるということも示された。そして彼らからは、客観的な指標を用いて語りの正当性を担保する様子が伺えた。様々な意見に触れることができ、批判にさらされうる環境であるからこそ、現在用いられているガイドラインや労働法、ハラスメントの定義などに倣い、当事者自身が第三者に対して「ブラック部活」を示していると考えられる。

（指導教員　照山 絢子）